

〔富岡鉄斎展によせて〕

鉄斎の世界

あれはいつの鉄斎展の準備のときでしたか、自在に掛けた軸を展いてゆきながら、目に付いたのが、表装の裂地でした。そこには鉄斎という落款の文字が織り込まれていました。そのときは誰か数奇者が織らせたものかと思いましたが、後で聞くと、鉄斎自身が注文したもので、自分の気にいった絵にはそれで表具させたということでした。そのとき私は、何と徹底した人だなあ、と感じ入りましたが、そう思って気を付けてみると、館藏品の中でも他にも同じようなことがあるのに気が付きました。

彼の用いた手紙の巻紙には、彼自身の手になる下絵が刷られていますし、愛蔵の七冊本の「西遊記」の表紙には、すべて色入りで表紙絵が施してあります。またちょうど昨年秋、京都市立美術館で開かれた生誕百五十年記念「富岡鉄斎展」の会場の一室には、数々の鉄斎の愛用品が陳列されていましたが、それらの品品にもやはり同様に鉄斎の手が入っているのを見出しました。

自分の文房具に自分の気にいった意匠を施すことは、古来造形家のよくするところではありますが、鉄斎の場合はそれがあまりにも徹底しているのが特色といえましょう。しかもその意匠は、あの鉄斎独特の筆太の線で所狭しと印されています。これらを見ながら、私はふと、あの旧石器時代の洞窟の石に残されていた赤い手形のイメージを思い起こしたりしました。

このように自分の身辺におくものにことごとく自らの手跡を印さねば気が済まない精神は、やはり鉄斎の絵にも十分に現れていると言えます。執拗に画面の隅々までを埋めていこうとする作画態度、上部の余白にも自賛をびっしりと書き込もうとする姿勢は、や



「西遊記」表紙絵

はり同じ気質に根を持っていると思われる。

この気質は、見方によれば、周囲のものすべてを自分の支配下におきたいという、強い自己主張のようにも見えますが、鉄斎の場合、その伝記からも知られるように、決して周囲の人達に高ぶった接し方をしたわけでもなく、また要らざる優越感に悩んだ様子もありません。それとは逆に、強い理想を抱きながらも、生活は実に慎ましく質素であり、世間的な出世など全く意に介さなかったのです。言うならば、鉄斎が自らの手跡を付けて身辺に配したものは、自己主張のためではなく、自己の表現の一端だったと言えましょうか。

鉄斎がいろいろな画法や書法を学んだことはよく知られていますが、しかしお手本が判るような絵や字は一点も残していません。どれも鉄斎の体臭を強く放つものばかりであります。そこには、自らの規範を外に求めず、飽くまでも自己のうちにきづこうとする心意気が強く感じられます。それは取り入れたものはすべて自分の血肉としなければ気の済まないという、ある体質化した精神の表われだとも言えましょう。

折りから鉄斎が活動した時期は、日本の各層が近代西欧を必死で真似ようとしていた時代でした。そんな中で、一見時代に背を向けるかのような行き方をした鉄斎は、学び（まねび）の真の意味を身をもって示し、現代の我々にその自足の喜びを伝えているように、私には思えます。（早川閑多）

季刊 美のたより No.75

昭和61年 5月30日

発行 大和文華館